古代文学会二十年の回顧と展望

市村　宏

1

古代文学会の編集委員会から私に課せられた執筆題目は、このように長くいかめしいものである。私は今郷里の信濃毎日新聞から「こし方の記」の執筆を求められ、来し方行末を思い起しているのだが、その一つに古代文学会二十年の回顧もあった。そして展望とは前途の展望の意味であろうから、これはお若い方の御意見を承りたい。

古代文学会は昭和三十五年の創立で、昭和五十五年十二月には満二十年を迎えることになる。二十年という歳月は、生れたばかりの赤ん坊が一人前の大人になれるだけの歳月である。だから国も成人の日を設けて新しい「一人前」の前途を祝福する。学会の創立を赤ん坊扱したのではふさわしくないが、二十年の歩みは尊い。もともと東京にはこれに先んじて上代文学会があって、上代文学の研究に従う方達は概ねその傘下にあったのだが、研究活動が何かの事由でやや活潑を欠く事態があり、これを補う組織が求められるに至った。こうした要望に答えて、昭和三十五年一月、古代文学会は以下に名を記す方々によって結成された。機関誌「古代文学」は同年十二月に発行されたが、創刊の辞を巻頭に掲げていて、それにはこうある。

本学会の生誕における基本的希求は、今日の学界に伏存する、学閥学統、その他、人事関係に起因する、研究発表に対する俗世間的障害のすべてを除くことによって、学問研究における、もっとも純粋にして真摯自由な研究を専一に推進せしめ得る場を生み出すことである。

本学会は、この目標の完遂のために、本会の構成員は、すべて、現に、古代文学研究者として、もっとも活発に、新鮮重厚な研究を発表し、推進している研究者を、学閥・学統・学色・学歴のいかんにかかわらず、その研究成果、研究態度を主眼として構成し、学問・研究の純粋な進展を期するものである。

かかる目的達成のために、月例研究発表会、並に機関誌の発刊に重点を置くとあり、学問研究及び発表の純粋性を謳い、学問的情熱を謳歌するところにこの会の若々しさがあった。

2

昭和三十五年一月十八日、研究発表の第一陣は「万葉集巻十の人麻呂歌集所出歌について」と題された日大の森淳司氏であった。第一年目は続いて尾崎暢殃・中西進・鈴木正彦・長田貞雄・鴻巣隼雄・前野貞男・伊原昭・賀古明・江野沢淑子・青木生子の各氏が発表、十二月は二十六日に「万葉集巻十三をめぐる諸問題」について、出席十七氏の放談会を催した。また、十二月廿日付で、機関誌「古代文学」Ⅰが刊行された。

翌三十六年も研究発表は毎月励行され、前年度にはその名をみなかった方々に、戸谷高明・太田善麿・谷馨・中村啓信・阿蘇瑞枝の諸氏があり、また門前正彦・川口常孝・緒方惟精氏があって、最後の十二月に、私も初めて「住吉の浜の小松」を発表した。

また本年度から研究発表大会を催すこととし、九月十五、十六の両日にわたり、早大の小野講堂を拝借して盛大に行われた。発表者は中西・阿蘇・長田・尾崎・緒方、三谷(栄)・川口、鈴木・鴻巣・江野沢・戸谷・伊原・松田(章)・太田・前野、賀古・山路(平)の諸氏であった。

「古代文学」も十二月二十日付で2号が発行されたが、発行所は東出版株式会社に移っている。この号には鴻巣・前野・神田・伊原・川口の諸氏に交り、私も「万葉山柿考」を発表させて頂いた。

3号はまた発行所が武蔵野書院に変った。松田(章)・浅見・江野沢・尾崎・大久間諸氏の論文と「古代文学とは何か」という共同研究に、伊原・緒方・賀古・川口・戸谷・倉塚・中西・宮城(謙)・山崎(正)・渡部(和)・町方(和)各氏及び私がそれぞれ所見を述べ、十人十色の見解がおもしろい。

3

昭和三十八年度の研究発表大会は、私の勤務先の東洋大学へお招きしたので、今は昔のことと思えぬほど細いことまで覚えている。場所は大講堂下の小講堂であったが、十月十二日十三日両日ともに満員であった。発表者は十二日、和角・江野沢・鈴木・佐伯(仁)・藤沢(衛)、十三日露木・橋本・伊原・賀古・中西・尾崎・殿鵜・緒方の諸氏と私であった。会後、学内の食堂で懇親会を催し、これもにぎやかであった。

にぎやかで楽しい行事には、明治大学箱根仙石寮を拝借しての夏季セミナーがあって、これに参加してのよい思出も数々あるが、これなども明大の大久間教授のお手許には詳しい記録がおありであろう。湯上りの畳の感触が妙に万葉研究の討論にそぐうのである。会誌の十号は十週年記念の特集で、中西進(憶良の悼亡詩)・尾崎暢殃(花蔓)・江野沢淑子(「須賀の荒野」について)・渡部和雄(本歌における告発性)・針原孝之(釈教歌の源流)・河野頼人(万葉集略解の方法)・市村宏(かぎろひ考)・守屋俊彦(亀と渡海)の八編を収録する。

なおこの年の夏季セミナーの発表要旨も併録され、大久間喜一郎(古代人と言語)・緒方惟章(古代社会と言語)・小野寛(古代文学と言語)・賀古明(舒明紀以後の歌謡)と記載する。

昭和四十七年六月二十四日には、東京都教育会館を会場に、一五〇回記念研究発表大会を開催、私も「老の歌」を語って責めをふさいだ。

第一回古代文学講座を催したのもこの年、十一月二十五六両日、会場は学習院女子短期大学を拝借、「古代の人と心」を主題に、中川(幸)・阿蘇・大久間・賀古・橋本・渡瀬・小野・尾崎の諸氏が講義を担当された。シリーズ「古代の文学」が巻を重ねているのも喜ばしい。

4

前19号の執筆陣をみたが、創刊当初の名は全くみられず、私どもの世代からみれば新人のみである。だが古代文学の研究に傾ける熱っぽい雰囲気は少しも薄れてはいず、事業も完全に継承されている。世子は初心重代を説く。然らばこれでよいのだ。創立二十年、前途の展望は明るい。